

清音

第249号

発行所 木曾教育会

発行人 宮坂 寛

編集 木曾養護学校

第138回

木曾教育会総集會を終えて

今年度から新たに上松のヒノキの里文化センターから、駐車場に余裕のある日義の木曾文化公園文化ホールに会場を移し、第三百十八回木曾教育会総集會を開催しました。感染症対策や収容人数の関係から着席位置を一席ずつ空けて中央に集める会場としましたが、音楽同好会と有志の先生方による開会の音楽の「モルダウ」と、出席者全員で歌った島崎藤村先生の「朝」は、奥行きのあるホール全体に深い響きとなって拡がり、改めて参集する意義を感じました。

毎年、前年度の優れた実践

研究について発表していただく

会員発表では、昨年から立候補制となった信教全県研究大会で公開授業をしていただいた2名の先生を代表して開田小学校の小林一輝先生に、「足下から見つめる学習」と題して満蒙開拓についての公開授業の学びについて発表していただきました。木曾に育つ子ども達だからこそ、地域から歴史を学ぶ意味を大切にしたい小林先生の思いを強く感じる発表でした。

講演会では昨年より夏期大学で講義いただいている福江良純先生から、前年までの研究をさらに進め、島崎

藤村先生の2つの木彫像の木取り工程を、3Dアニメーションにした上に左右に配置、比較しながら説明してくださいました。その上で、これが解明できたのは、捨ててもおかしくない木片を今でも郷土館に大切に保存されていたからであり、そこには「木曾に息衝く教育があったから」と示していただきました。私たち木曾教育会にとって大変大きな意味があると共に、全会員が集まる一年に一度だけの総集會で学べたことがさらに意義深いことだと思えました。続きの研究成果を八月一日の夏期大学

でお話しいただけると聞くと、先生の研究をいつも惜しげもなく示してくださることから、今から当日が待ち遠しく感じます。講演後、福江先生からは「他山の木片」というメッセージを色紙に書いていただきました。

今年度も地域の未来を担い、地域の文化を受け継ぐ木曾の子どもたちに、確かな学力と、心豊かな人となるよう、相互に高め合う活動を大切にすべく、木曾教育会として歩んでいきたいと思えます。

木曾教育会会長

宮坂 寛(福島小)

理事会より

昨年度の総集會の反省に駐車場が不便という声が多く寄せられました。上松駅前駐車場の縮小の影響は大きく、いよいよ何とかしなければならぬ時がきました。

理事会では会員の先生方が駐車場の心配をせずに参加できる場所として「木曾文化公園文化ホール」に移そうという意見で早くから一致しました。

会場を移すというのはそれなりの手順が必要で、今までお世話になったひのきの里文化ホールへのご挨拶、大型看板の撤去、新会場の予約、挨拶、下見、打合せ、会場に近い講師宿泊場所の確保など、会長が率先して動いてくださったり、教育会事務局長に細かな手配をしていただいたり、理事会全員で準備を重ねて参りました。お陰様で当日は新会場にて総集會を開催できましたが、思いの外客席が寒いなど、改善点が何点ありました。これからも会員の先生方の声を大切に、より良い研修の場となるよう努めて参りますので宜しくお願いします。



学校紹介 「木曾養護学校」

本校は、来年度創立三十周年を迎えます。木曾地域の人の長年の熱い願いを受け、平成八年に開校しました。学校敷地の山手には水無神社があります。開校にあたって、水無神社の宮司さんが、「神の子のために」と本校設立のために、土地を提供してくださいました。

今年度は児童生徒三十一名でスタートし、学校目標「(児童生徒も職員も)自分から自分で 精いっぱい」を木曾養護学校の愛言葉に、日々の教育活動に精いっぱい取り組んでいます。

それぞれの自立課題に向けて乗馬・馬房の掃除などの活動を行っています。

また、各部・寄宿は今と将来の生活の充実を目指した教育活動を行っています。生活単元学習や作業学習は、毎日の活動の積み重ねの中で、それぞれが願いや目標をもって取り組んでいます。高等部は校外販売を実施しており、昨年の木曾の手仕事市では、木工製品、陶芸製品、クラフト製品を県内外の多くの方にご購入いただきました。



週指導案簿カバー 販売中

した。

今年十月十九日(土)に駒の子祭を開催し、一般公開も行います。各部の催し物や作業製品の販売会など、学校一丸となって取り組みますので、ぜひご来場ください。(木曾養護 小林真理子)

ホースセラピー



六月二十九日(土)に信濃教育会と木曾教育会の共催による基礎講座「ホースセラピー」木曾馬とともに過ごす休日」が開催されました。

休日の終日活動に、県下各地からたくさんの方々が参加してくださいました。

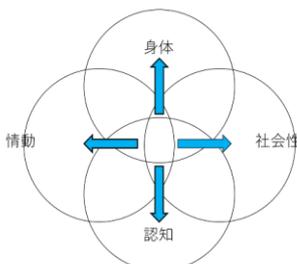
「生涯学習、自ら望んで学び続ける」そういう姿勢を持つ方が多いのだと実感する会でした。近くに学ぶ場さえあれば、それが実現できそうです。「馬とふれあう」という場を提供してくれる地域は長野県といえども、そう多くはないのかもしれませんが。

そんな中、木曾養護学校は木曾馬牧場から車で三十分以内という地の利にあります。本校で二十五年間続く「馬の学習」では、子どもたちの一つひとつの行動には、複数の観点が内在すると考え取り組んでいます。例えば「馬に乗る」という行動には、「怖いな、でも乗りたいな(情動)」「遠くを見ると馬の動きに体を合わせられる(認知)」「もっと速く乗りたいです(コミュニケーション)」

ン)」「緊張がとれてきた(身体)」など、様々な感情や情報が織り込まれています。

そして、馬とかわる中で、子どもたちの意欲をもとに、今、その子の最も課題となっている点を対象とすることができるとあります。

馬を媒介(パートナー)とした学習



滝坂信一さん(日本治療的乗馬協会)

参加者の皆さんには、そんなお話を事前にして、実際に馬とかわる中で実感していただきました。「心や体を育む大事な学びとして、命あるものとの学びづくりを進めていければ」という参加者の声もあり、充実した時間となりました。

(木曾養護 伊藤尚志)